

真宗に於ける感性の意味

毛利勝典

一、教学と現場の乖離

現在、浄土真宗本願寺派の教団内に於いては、今日の教団の状況について、また、もっと普遍化して言えば、宗教と現代社会の關係について、「教学と現場の乖離」ということが一つの問題として提議されている。これは、今日の教学が、日常生活から分離するような形での特門化の上に成立しているために、日常生活の問題を無視するような形で、一人歩きを始める危険性のあることを指摘されているように思える。

二、感性の意味

西谷啓治氏は、現代の状況に関わる研究者の態度として、次のような点を指摘されている。

特に現代の場合は、現代という時代が宗教不在の時代であり、現代の宗教は現代不在の宗教という、そういう引き裂かれた状況のなかで、引き裂かれるようにして存在しているのが、現代に生き

る人々のライデンですね。そういう苦悩ということがないと、学問研究というのは悪い意味での遊びになってしまうのではないのか。学者にはなっても、真宗というものの学的研究ということにはならないのではないか。

（『浄土教と現代』）

西谷氏は、このように、真宗学の研究者は、宗教と現代の矛盾した關係を自覚し、その苦悩の上に立つことの重要性を指摘される。そして、研究者がこの苦悩を自覚するそのあり方については、

ライデンということに結びついて、ライデンシャフト *Leidenschaft* という言葉もあります。これは英語でいうと *passion*、情熱という言葉ですね。パッションというのは *passive* という言葉とも結びついていきますから、要するに何かの働きを受ける、自分の身体で受けとめるということ、身体といっておかしければ、現在の生きた身の人間として、自分の日々の生活で受け取めるということです。そこに苦悩ということもあるわけです。……実存という態度から言えば、ライデンとかライデンシャフトとか、要す

るに、自分の生きた身で受けとめ、身体でものを言うことが、どうしても必要になってくるのではないか。

(前掲論文)

と述べておられる。つまり、宗教と現代の矛盾した関係の中で自覚される苦悩とは、身体的で受動的な実存的態度の基礎となるものであると理解することができよう。

これら、西谷氏の指摘を窺う時、教団の「教学と現場の乖離」という問題は、西谷氏の言われる「宗教不在の現代、現代不在の宗教」と軌を一にする問題性を含んでいることが解る。つまり、教学と現場の乖離と言われる背景には、教学者が宗教と現代との矛盾の関係の上に成立する実存的な苦悩を自らのこととして担わず、また、その苦悩が今日の教学の中で生かされていないということが言える。そして、このように情熱や苦悩は、その性格上、受動的で自らの身体に関わった実存的態度の上に初めて自覚されるものであるが、この自覚を呼び起こすものが感性と言えるのである。

三木清は、「イデオロギーとパトロギー」の中で、ロゴスの意識とパトロスの意識を定義して、次のように述べている。

ロゴスの意識が、感性知覚の如きものから思惟の方向に高まるに従って、その対象性或いは客観性を次第に増してゆくのは反対に、パトロスの意識は、主体の方向に高まるに従って、その対象を失い、次第に無対象となつてゆくと考えることができる。そこに両者の対立が最も明瞭に現われる。

真宗に於ける感性の意味(毛利)

このように、ロゴスの意識が意識それ自身を対象化、客観化することによって、思惟の方向に深まるものであるとするならば、その方向とは逆に、主体の方向、無対象の無意識の方向に深まることによって、次第にその対象性を失いながら存在するのが、パトロスとしての情熱や苦悩である。そして、この情熱や苦悩を、ロゴスの意識の方向に対象化、客観化してゆくものが、知性や、我々が感性と呼んでいる感情や感覚なのである。

鈴木大拙氏は、この感性と知性、それに苦悩との関係について、人間の宗教的意識の覚醒の過程の中で、次のように述べている。(『宗教経験の事実』)

反省のないところに思想はない。反省は組織せられねばならぬ、知識とならねばならぬ。が、反省はまた必ず感性で裏付けられてゐる。感性の伴わぬ反省はない、感性は、ここで最も広い意味に用いられる、普通に云う感覚も感情も共に含む広い感じである、或いは深い感じであると云つてもよい。此の感じが反省に伴うものである。これを悩みと云う、悶えという。

このように、人間のパトロス——情熱や苦悩——を自覚化させるものとして、感性は重要な意味を持つと言ふことができる。

三、真宗の感性

今日、真宗学の学問方法の研究に於いては、信楽峻磨氏が指摘されているように、

真宗を対象とする近代的意味での学問として、他の一般的な学問と同様に、その対象としての真宗を客観的に把握し、それを分析し統合して、体系的に説明するところの科学（Science）としての意味を持たなければならぬ。（「真宗学研究序説」）

と述べられているような、近代的学問方法にのっとった「客観的な立場」と、もう一方では、

その対象としての真宗とは仏教である以上、それは私自身が仏に成ってゆくための教えとして、私に対して与えられたものであって、それはひとえに私にとって主体的に領納されるべき性格をもっているのである。（前掲論文）

と述べられているような、自らの成仏を目的とした「主体的な立場」の、この二つの矛盾した方向の緊張関係の中で成立している。

ここで、真宗学に於ける「主体的な立場」をより主体的に捉え、また客観化しようとするならば、主体的な立場とは、先に述べたロゴスの意識とパトスの意識の矛盾した関係の上に捉えることができ、また更に、情熱や苦悩を根拠とした研究者の実存的態度として理解し得るであらう。つまり、主体

的な立場とは、ロゴスの意識の立場によってのみ捉えられるものではなく、それが、人間のパトス——情熱や苦悩——より自覚化されるものである以上、知性と同様、よりそれ以上に感性に於いても捉えてゆかなければならないのである。

四、まとめ

「教学と現場の乖離」と言われる教団内状況の中には、真宗学が思考中心の「客観的な立場」に傾いたところ、そこに人間の実相を知性によってのみ捉え、感性の問題を欠落させてしまっていることが、その原因の一つと考えられる。我々は、感性の問題を欠落させてしまっているために、現代人の苦悩を明瞭にすることができず、また、その苦悩に対して答えてゆくことができないのではなからうか。そのためには、真宗学に於いては、客観的な立場の矛盾統合の中で、より主体的な立場を明瞭にすることによって、その立場が知性的客観的な思惟によってのみ捉えられるものではないことを確かめなくてはならない。つまり、主体的な立場は、その思考の根底に於いて、感性の問題を通して、より深くパトス、無意識の領域に関わったものとして、また、自らの身体に関わった実存的態度の問題として理解されなければならないのである。

（龍谷大学大学院）